

2022年5月の大気大循環と世界の天候

大気大循環

北半球の極渦は平年と比べて強かった。北半球の中緯度帯では半球規模で波列パターンとなり、500hPa高度は日本の東海上～ベーリング海、北米東部、ヨーロッパ南西部、西・中央シベリアで正偏差、北米北西部、ロシア西部、東アジア東部で負偏差となった。200hPa風速をみると、ユーラシア大陸中部の亜熱帯ジェット気流は平年の位置と比べて北寄り flowed。偏西風は、日本付近で平年と比べて強かった。海面気圧をみると、ベーリング海、ヨーロッパ南部、中国東部～日本付近で正偏差、北半球の高緯度帯、北米中部、日本の北では負偏差となった。850hPa気温をみると、ベーリング海付近、北米東部付近、ヨーロッパ南西部、西・中央シベリアで高温偏差、北米西部、ロシア西部、東アジア東部で低温偏差となった。

熱帯の対流活動は、平年と比べて、インド南西部～東南アジア、南シナ海北部～日本の南海上で活発、フィリピンの東海上、太平洋赤道域の西部～中部では不活発だった。赤道季節内振動に伴う対流活発な位相は、上旬から中旬にかけてインド洋～太平洋付近を東進した。対流圏上層では、ユーラシア大陸上の亜熱帯ジェット気流に沿って波列パターンが見られ、南アジア北部付近で高気圧性循環偏差、日本の西で低気圧性循環偏差となった。また、太平洋熱帯域の西部では、対流圏上層で南北半球対の低気圧性循環偏差となった。対流圏下層では、インド洋で南北半球対の低気圧

性循環偏差、フィリピンの北東海上で高気圧性循環偏差となった。海面気圧は、熱帯域では、太平洋中部～大西洋で正偏差、インド洋～インドネシア付近で負偏差となった。南方振動指数は+2.9だった。

世界の天候

世界の月平均気温偏差は+0.18°C(速報値)で、1891年の統計開始以降、5月として8番目に高い値となった。5月の世界の平均気温は、上昇傾向が続いており、長期的な上昇率は約0.73°C/100年(速報値)である。

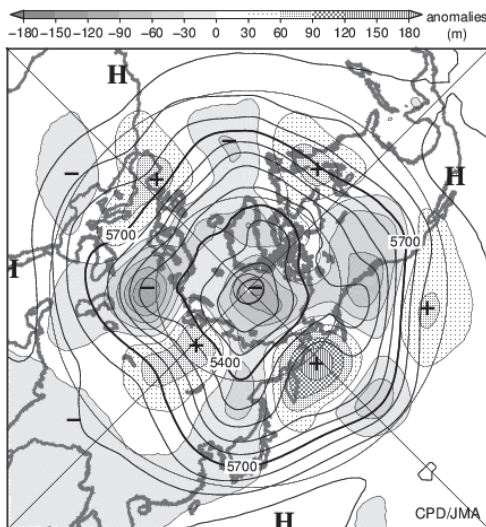
主な異常天候発生地域は次のとおり。

- 中央シベリア北西部～西シベリア北東部、中央シベリア南西部～中国北西部、ヨーロッパ中部～北アフリカ北西部、米国南部～メキシコ中部、オーストラリア北東部～ニュージーランドで異常高温、中国南東部～インドシナ半島中部、南米南部で異常低温となった。
- 沖縄地方～フィリピン、中国南部～インド北東部、カナダ中部～米国北部、オーストラリア南東部で異常多雨、西日本～中国東部、ヨーロッパ東部～西部で異常少雨となった。

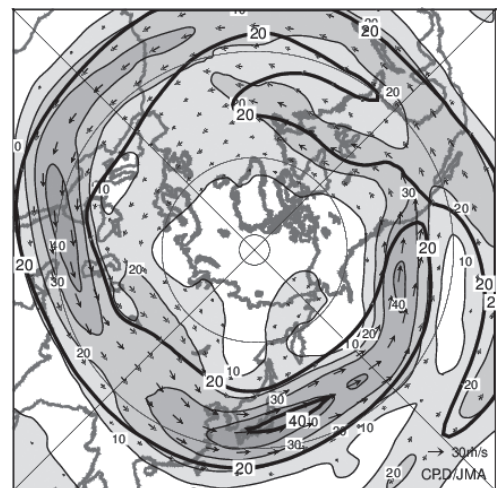
(気象庁 大気海洋部 気候情報課)

※ より詳細な情報については、気象庁ホームページ「気候系監視速報」をご覧ください。

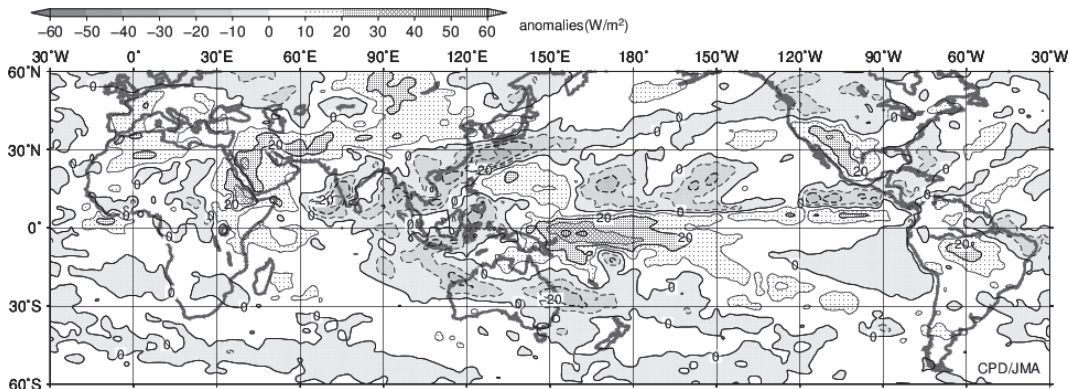
<https://www.data.jma.go.jp/cpd/diag/sokuho/index.html>



2022年5月の北半球月平均500hPa高度及び
 平年偏差
 等値線間隔は60m。陰影は平年偏差。平年値は
 1991～2020年の平均値。

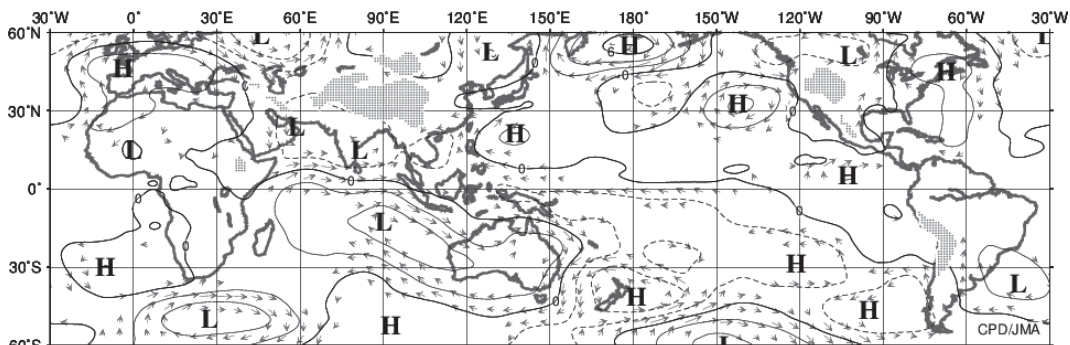


2022年5月の北半球月平均200hPa風速及び
 風ベクトル
 等値線間隔は10m/s。太実線は平年の風速で等値
 線間隔は20m/s。平年値は1991～2020年の平均値。



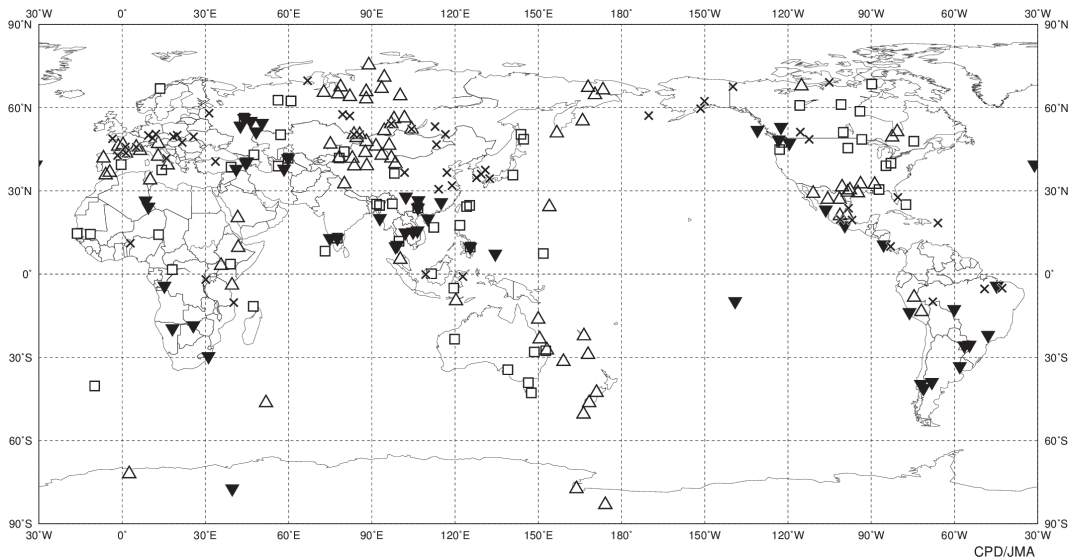
2022年5月の月平均外向き長波放射量年偏差

等値線間隔は 10W/m^2 で、値が小さいほど対流活動が活発であったと推測される。米国海洋大気庁 (NOAA) より提供されたデータを用いて作成。年偏差は1991~2020年の平均値。



2022年5月の月平均850hPa 流線関数年偏差及び風年偏差ベクトル

流線関数の偏差の等値線間隔は $2 \times 10^6\text{m}^2/\text{s}$ 。年偏差は1991~2020年の平均値。



2022年5月の世界の異常天候分布図 △異常高温 ▼異常低温 □異常多雨 ×異常少雨
異常高温・低温は標準偏差の1.83倍を超える場合、異常多雨・少雨は降水5分位値が6及び0。